



## Bグループ 山田湾に浮かぶ牡蠣の養殖棚にて 引き揚げ作業を体験

Bグループの3名は、大沢漁港に移動し、大沢養殖研究会 中村敏彦さんの船に乗せていただき、牡蠣の養殖棚引き揚げ作業を見学しました。天気も上々、波も穏やかで、透明度が高く、澄み切った海につるされている牡蠣を目の当たりにしました。



その後、中村さんが震災後にご自身で再建したKH BASE (牡蠣、帆立小屋) で、水揚げしたばかりの殻剥き作業を体験。簡単に見える作業は、いざ始めてみると、最初の殻に穴をあけることさえ至難の業。それでも、こつを掴み始めるとどんどん殻を剥くことができ、作業が楽しくなり、「もっと剥きたい」と牡蠣を追加してもらいました。中村さんに牡蠣作りの魅力、山田の牡蠣のセールスポイントなどインタビューした後、剥いた牡蠣をお土産にいただきました。

ちょうど昼食時間となったので、やまだ観光物産館「とっと」で購入した帆立貝や魚と一緒に、自分たちが剥いた牡蠣も焼いていただきました。さっきまで海にいた牡蠣が美味しくなく、自分たちが剥いたということが更に味を引き立てます。食事後は、「とっと」事務局の佐藤博子さんにインタビュー。この店の一番の売りは何か、これから、どんなことをしていきたいかなどをお聞きすることができました。



## マップのためのランドマーク探し

「これじゃあ、仮設店舗にお客さんが行きたくても、行けないじゃないですか。」  
国道から仮設店舗までたどり着けるランドマークを探しながら、参加者のつぶやき。  
ランドマークになる建物などが津波で流失、国道からの店舗までの表示がほとんどありません。わずかに残る建物や表示などもいつまでそこにあるかわからない…。  
だからこそ、今回のフィールドワークの意味があるのだと、笑顔で、ランドマークを探し続けます。  
「震災のときはアメリカに居て、実感が無かったんですが、今、震災を感じています。」神奈川からの参加大学生が、草が生えて線路の先が見えなくなっている踏み切りで佇みながら、ポツリと話しました。

## Cグループ アカモクで新たな商品やメニューを開発する 「三陸味処三五十 (みごと)」でインタビュー

“山田町のアカモクをもっと全国に広めたい!”  
“アカモクと共に山田町を活性化させたい!”

“アカモクで新たな商品やメニューを開発したい!” などなど、山田湾で採れる「アカモク」への思いを熱く語る大杉さん (三陸味処三五十) そんな「アカモク」も以前は地元の人には見向きもされず、「あんなもの食べるの! 美味しいの?」と言われ、捨てられていました。しかし、調べてみると、「アカモク」はものすごく栄養価が高いことを発見! カルシウム、カリウム、鉄分、美容にも良いとのこと。そこで大杉さんは、「アカモク」をなんとか活用できないものかと15年も前から地道に研究を続けて、「アカモクの佃煮 (命名「山田のおみごと」)」を製品化したのです。

その後も「アカモクラーメン」「アカモクスープパスタ」など新メニューを開発し、山田の町から「アカモク」を発信しています。

山田町、そして岩手の新しい名産にしたいという、熱い思いをもって「アカモク」普及に取り組んでいる大杉さん。震災があり被災地となった山田町を、山田湾産の「アカモク」で盛り上げていきたいという大杉さんの情熱はこれからも続きます!



## 地産地消にこだわるうどん店「釜揚げ屋」で取材



震災により以前の店舗はなくなり、現在は仮設店舗で営業している「釜揚げ屋」の店主川村さん「インタビューに応じている暇などない。私の動きを見て、肌で感じて体験してもらいたい」。

すぐに学生3名はエプロンを身に付け、作業場へ。学生は、名物生せんべいの袋詰め、営業前の下準備、ランチに出すメニューの調理等々、ひたむきに取り組みました。

そんな学生に、時折川村さんが声をかけ、従業員の皆さんも優しく学生に教えている光景が見えます。

釜揚げ屋は素材と地産地消にこだわりを持っています。県産小麦をブレンドした自家製麺、素材にこだわった出汁やたれ、うどんを彩る食材も厳選しています。

ランチ時間が終了後、学生たちはうどん打ちを教わりました。ここでは学生の質問にも答えてくださいました。仕事に対する厳しさや、人と接する大切さを改めて教えてくれた職人さんでした。

また、釜揚げ屋のうどんを食べに行きたいと感じたのは私だけではないはず。



## 最終日 共通作業

### 食のこだわりマップWEBコンテンツ作成・振り返り・分かち合い



最終日、「山田発! 食のこだわりマップ」を構成するWEBコンテンツ作成を行いました。フィールドワークで「見て」「聞いて」「触れて」「体験して」「感じた」それぞれの思いを持ち寄りながら、ワイワイガヤガヤ楽しそうに作業を進めます。この日、マップ完成! とまではいきませんでしたが、「また山田にきたい! またあの人に会いたい! また食べにきたい!」そして「つくる体験をしたからこそ発信できるものがある!」という思いをみんなで共有することができました。参加した大学生そして山田町の方々にとって、それぞれに意義のあるマップを今後のワーキンググループで仕上げていくことを確認し、山田を後にしました。



## 参加した大学生の声

初めて被災地に行ってみて、ニュースで見ると圧倒的に衝撃を受けました。しかし、訪問させていただいた人々は、とても前向きで、自分の作るものに自信を持っていて、その気持ちを応援したいと思いました。山田の人々だけでなく、一緒に3日間も同僚の仲間との出会いも交流人口を増やすという意味でとてもいい出会いでした。(立教大学生)

交流人口を増やすということは難しく、あの人に会いに行くというのはあまりないのではと思っていましたが、今回のフィールドワークで「人に会いに行くってこういうことなんだ!」「交流人口を増やすってこういうことなんだ!」と自分の中の考えが変わるような体験ができ、とてもよかったです。(岩手県立大学生)